

↑頁題目	
神名考(1)——記紀冒頭の神 (上下) 1——	誤
神名考(1)——記紀冒頭の神 (1) ——	正

神名考 (1)

——記紀冒頭の神(上下) 1——

神 田 典 城

世に数多の神がある。それぞれに何かしら人々の「かくあれかし・かくありたし」の思いを体现するべく、然るべき機能を担い、相応の性格を内包してこの世に存在し始める。しかしその神が興り、人の営みの中に入り続けるうちに、人々の欲求のおもむくところ、その神本来の性格・機能にさまざまな要素の加わることが多く、見近な事では、現在どこの神社へいっても、たいがい交通安全と商売繁盛はレパートリーに入っているのなど、その端的な例といつていい。また時には元の姿とは似ても似つかぬものになる事すらある。歌聖として尊崇されるに始まった柿本人麻呂に対する信仰が、「人麻呂↓人丸⇨ヒトマル⇨火止まる⇨防火の神/ヒトマル⇨人産まる(ヒトウマル)⇨安産の神(上代、男子を表わす語だった麿は、後世には丸となった)」となったのなど、その最たるものだろう。

けれども同時にこの人麻呂の例は、既成の神に対して、人々が神名の語呂合わせによって、新たな機能を付与しおこせた事を示しているわけで、ここからすれば、逆に、神の名には、それぞれの神の性格・機能が集約的であらわれていることもまた、よく了解できる。まさに「名は体を表わす」のである。

もちろん人麻呂の例はもともと人間であり、神名とはいえ元来が人名であるから、いわゆる「神」観念一般からすればやや特殊な部類に属する。しかし要するに、神名と「神」たる存在との関わりということ言えば、通常の場合、ある特定の神の存在が人の意識の中にかたちをとり始め、それが「しかじか」と固有名で呼ばれた時、それはそのま

まその神の性格・機能を表現したものにほかならないということである。

従つて現在に伝わる神の機能が、見かけ上様々あつても、その出发点に於ける性格・機能は、神名の原義の中に保持せられているとしてよい。

このような状況は、説話と共に語られる神についても同じ事と考えてよく、説話というものが、発生した時のプリミティヴなかたちに様々な要素を取り込んで成長する、その過程を考慮に入れるならば、ある説話に登場する神につき、その中で様々な行動には、その神の本来とは関係のない要素も含まれてこよう。これは今、記紀神話に登場する神々を念頭に置いて述べているわけだが、神の性格・機能を考えるうえでまず第一になすべきなのは、その神名の語義を吟味することであり、そのうえで、説話内容との関わりを考察するというのが適切な手順であろう。

筆者は日頃このような観点で神の名を眺めてきたが、これまで一部を除いて具体的な形にする事がなかつた。しかし神話を研究対象とする者として、少なくとも記紀に見えている神について、一通りその機能を考えしておくことは基礎として必要なことであろう。そこで本稿を手始めとして、本論集の場を借りて、随時、記紀神話に登場する神々を取り上げ、それぞれが何者であるのかにつき、神名を構成する語の示すところを探り、そこにあらわれて来たものと説話内容との関わりを睨み合わせつつ考察してみたい。

形式は神名ごとに「語義」「考」と標目を立てるかたちで進めるが、述べたように、神名の原義に遡つて考えることを基本的態度とするため、溝口睦子氏の言う「語尾の「神」の語をとつても名称として独立できるもの」及びそれと同様な状況にあるミコト（尊・命）は、はじめから省いたかたちで扱うことにする。また神名の表記については、各神名の項のはじめに、記紀並びに先代旧事本紀・古語拾遺あたりのものを掲げておき、あとは片仮名書きを原則とする。

本稿ではまず記紀神話の冒頭に見える神から取りあげる。

アメノミナカヌシ〔表記〕天之御中主神（記）・天御中主尊（紀・旧）・天御中主神（拾）

「語義」アメ・ナカ何れも各文献の表記にあらわれている文字面の通り。ミナカのミは美称としてよからう。ただしアマテラスなどの例では、古事記と日本書紀とで「御」の表記の有無という相違があるのに、この神については右掲の如く、各文献を通じて「御中」である。このことについては寺田恵子氏が詳述されているが、筆者はまずもつてこの神名の核は、ナカというのでは足りない、ミナカと紛れなく示すことに表現の指向するところがあるように思える。そして、ミナカには万葉集に「国のミナカ319」「里のミナカ3463」の例があり、また紀第六段で「誓約之中」に「ウケヒノミナカ」の訓があること、寺田氏の指摘があること、これらの事例からしてナカにミを冠すること、真の中央、即ちある広がりの中で、他のどこでもない、まさにある特定の一点であることを表現しているのではあらう。

あるいは、接頭語ミには「ミヤマ（ミ・山）万133」などの例もあり、これには深山と書かれる例も出現する。古代にあつて山が、生活領域の外にある、踏み入り難き領域として存在したことからすれば、「深」とはその人跡の及び難さの強調とならう。とすれば、ミにはその物の特性を、より強めるはたらきがあるのかもしれない。ミが同時に美称・尊称でもあるのはこの辺に起因するのではなからうか。

まあミの由来はともかくとして、本稿ではアメノミナカで天の真の中心という位置が示されていることが確認できればよしとしたい。

ヌシについては、宣長が示した「：の主人（ウシ）」がつづまったかとする見解が妥当なところだろうし、ウシがウシハクに由来する語との、これまた宣長の推定に反対する理由もない。従つてヌシとは、物事、また然るべき立場に於ける中心的な人物（存在）・管掌者という趣をもつ語であらう。従つてこの語尾は、ある事物をもつばら扱う・主宰する存在、言うならば頂点に立つ者であることを示すのだろうし、また例えばそれがある技能的な部門などでもあれば、エキスパートであること、即ち、他者に代え難い能力の所有者であることを示すものでもあらうから、（ウシ・ヌシ共に）尊敬すべき対象であることを示す語としてもはたらいたのであらう。

これをアメノミナカとの関係で考えれば、「天の中心」という位置を占めて居る尊貴な存在を言う名ということになる。ただし、そのような場に居を占めていること自体に意味があるのか、もしくはそこに居て何事かを管掌しているのかは、ヌシという語尾の示す意味の巾からすると、これは神名の分析からだけでは決定できない。が、少なくとも

も「中心」という「場」なり「位置」をそのまま神格化したものではなく、そこに「居る」何者かであることを読み取るべきだろう。なおこの神がヌシを語尾に持つことについては、「考」でも更に触れる。

「考」この神は、よく知られているように、記紀に於ける扱われ方に大きな問題がある。古事記で冒頭第一番に出現を語るのに対し、日本書紀では別伝の中の更についてのように取り上げられているに過ぎない。本稿ではこの問題に深く取り組むつもりはないが、後に若干触れる機会がある。

ところでこの神は、説話の中で何ら具体的に行動する姿を見せることがなく、また信仰の対象として祭られることも全くなかったことが、既に先学によって明らかにされており、かなり新しい時期に観念的に創出された神であると説かれている。更に中国で形成された北極星への信仰を取り込んだものとも説かれている。

「語義」に述べたところからすれば、天という漠とした大きな広がりの中で、中心たるあるポイントを意識するとすれば、星辰の回転運動の中で、揺るぎないある一点を占め続ける北極星以外にはなからう。

星辰の運行についての知識に関する資料としては、推古十年紀に百濟から天文地理の書が将来されたとの記事のあることが、よく知られている。そして、近くは天武四年紀に占星台設置の記事を見るに至るし、一方でヒジリ（日知り）ヤツクヨミ（月読みⅡ月齢を数える）といった語も存在している。いずれにしろ、記紀の原型が形成されつつある時期には、日月星辰の運行に関する知識はかなり蓄積されていたわけで、その運行の中心に北極星のあることは、周知の事実としてよい。

従つて北極星というもののありようにこの神成立の基盤があることは疑いない。そしてこの北極星とアメノミナカヌシの関係は、これまた様々に説かれているが、筆者が注目すべきポイントと考えるのは、北極星を中心として回転するのは、星辰のみならず、日月もその軌の中にあるという事実である。

言うまでもなく、ある時期から大和朝廷の中核たる天皇家は、太陽神アマテラスの子孫ということを標榜するようになり、伝承としてはアマテラスを至尊とする神話体系を獲得する。ところでアメノミナカヌシなる北辰に由来する神となれば、太陽神と言えど天空を渡っていくもの、つまりは北辰の占める場を中心としてその周囲を巡るものの一員ということにならざるを得ない。そして不動の位置を占めるものとその周囲をめぐるものとを対比すれば、不動

ものの方が上位者と観ぜられるのが自然というものだろう。もちろん太陽の運行は星辰と同一ではないし、また北辰は夜の世界のもので、太陽は昼のものというのであれば、不変の存在に対して移ろうものと捉えてみてもよいだろう。太陽と言えど夕べには地の果てへ没し、冬には衰えるのである。対して北辰とはそのような世の移ろいを越えたところに存在し続ける。これを神観念に置き換えれば、北辰への信仰とは、太陽神の更に上位の神をあらしめるものということになる。

日本の支配者の称たる「天皇」号の由来を、北辰の神格化である天皇帝に求める論が有力で、筆者もこれに同調するものだが、そうとすれば、自らの祖先を太陽神とした日本の大王家は、北辰に由来する称号を採用することで、更に自らをその上位に置く神学を獲得したということになろう。それはアマテラスを至尊とするパンテオンからすれば、太陽を超越する存在とは、世にあらゆる事物を越えた存在ということになる。

もちろん中国に於ける北辰信仰にもいろいろな段階があり、また日本に於けるその享受の実態も、いかなる認識のレヴェルに於て行われたものかを推察する力は、残念ながら今のところ筆者にはない。しかしアミノミナカヌシを北辰の投影と見定めて、わが国の古代の状況に照らしてみれば、概ねこのようなイメージ世界が浮かんで来るだろう。この神は古事記冒頭、この世の初めの筆頭に掲げられている。それはこのように見ればまさに理の当然であり、逆に日本書紀でこの神の名を掲げた所伝が、一書の片隅にしか示されないのも、アマテラスを担ぐ所伝よりもタカミムスヒを中核としたパンテオンをよしとする書紀編集のあり方からすれば、日神をも越える存在を全面に押し出すことあまりな先鋭さに、扱いかねたということなのかもしれない。

ところでここで「語義」にも触れた、「ヌシ」語の問題について述べておきたい。

筆者は述べたように、このアミノミナカヌシなる神名が、記紀成立の経過の中で、かなり新しく創出されたものとする、現在の学界の趨勢に従うものだが、ヌシという語尾は、このような状況と深くかわると考える。大体は吉井巖氏の言われるのに近いところで考えているが、更に今少し、命名の現場に即して推測してみたい。

この神の成立について、具体的にいつなどと特定することができないのはもちろんだが、右にも若干触れたが、それは既に記紀に体系化される神話素材の多くが存在していた時期なわけで、そこには人になぞらえて造型された神々

の行動が語られている。即ちそのような状況の中で「神」といえば、自然の不可思議な力の発動そのものを言うのではなく、そのようなはたらきを「つかさどる」、人と同じ姿を有する神をイメージしただろう。

即ち、もともと自然の不可思議な力をカミとして対象化し、その発現する力・はたらきに名を与えて認識の具とするところに生じたのが神名というものであろう。しかし、人一般の傾向としては、抽象的なものを把握するには多くの精神的緊張を必要とするわけで、向かい合う対象として、より具象的なものを望んだのであろう。本来姿かたぢのないとされるカミと交流するのに、木や石などという、現実に見え、手に触れられる具象的物質を必要としたことにも、それはよくあらわれていよう。やがてカミ観念はそのようなあり方を離れ、ある具象的存在体としてのカミ概念が求められるようになり、人自らの姿になぞらえた神、人格神と言おうよりは、人態神とも言うべき神のたちが創出され、それは説話の中などで、人と同じく顔があり、手足もあつて話し、歩き、するものとして活写され、これが神のかたちとして確立した。そのはじめは、あるいは自分たちを誤りない方向へ導いてくれる、首長の姿の投影だったのかもしれない。

ともかくそのように、人と同じ姿をもつイメージのもとにあるカミ観念が確立している中で、新規にある神格を創出し、それに名を与えるという状況なのである。

もちろんこの神の眼目は、天の中心に存在するところにあつた。その「場」はアメノミナカなる語でまずは表現できる。しかし場を示しただけではただそれだけのことでしかなかく、これを神名たらしめねばならない。日本人は、神の機能・性格を表わした語を中核とし、それに神たる存在であることを示す語尾を付すことで神名を構成してきた。そのような語尾には、溝口氏が論じられたように、ヒ・チ・ミ・ネ・ノなどがあり、そしてヌシがある。

吉井氏は、この神名語尾としてのヌシについて、その用例を聞かれた上で、他の語尾と対比しつつ、次のように述べられた。

ヌシ・主は所有被所有の関係、支配被支配の関係、主客の関係、管掌被管掌の関係から生まれた所有・支配・主・管掌の側に立つ言葉と言える。

かつて、自然物・器物、あるいは機能そのものが神と考えられた時代があり、それらの神の把握は、みづち・しほづち・野づち・山づち・やまつみ・わたつみ・ことだま・国たまなどの神名表示となつて残つてゐる。そのような神観は、なお現在までも続いているのであるが、かかる神観につづいて、性別表現を示す語やムチ・カミ・ミコトなどの敬称を加えて呼ばれる神が、しだいに人格神としての色彩を濃厚に加えて語られるようになる。しかし、物・機能に即して呼ばれる神も、これにつづいてあらわれる人格神も、その神名表示からみるかぎりでは、けつして神成立の原核としての物や機能と離れた他者とはなつていないのである。

ところが、神名にヌシ（主）を付して呼ばれると、神名の意義には大きな変化がおこることになる。

ヌシ（主）が所有・支配・主・管掌の側に立つ言葉であるからである。（中略）

ヌシ（主）を名にもつ神は支配被支配、所有被所有、管掌被管掌と言う政治的社会的性格を一段と強く打ち出した神名と言えよう。

筆者も他の語尾とヌシとの間に懸隔のあることを思わずにはいられない。記紀に於けるカミやミコトにはまた別の問題もあるが、そのカミ・ミコトを含めて他の語尾が物・機能——先に述べた「その発現する力・はたらき」にあたらう——に即しており、対してヌシを付すと、そこから離れた「他者」となるとの指摘は、この語の担うところを見事に言い当てていよう。

吉井氏は、このヌシを名にもつ神を包括的に捉えて、記紀神話の構想へと迫られたわけだが、筆者はまたやや別の角度から考えてみたい。

アモノミナカヌシという神名が、かなり意識的に創出された物と了解されていることは既に述べてきた。ところで、記紀神話の中で、やはり意識的に創出されたと思われる神名がもう一つある。オホクニヌシである。

オホクニヌシなる神名についての詳細は、既発表の拙稿（註）に譲るが、いわゆる国つ神の幾柱かを統合して、地上全体に支配者にふさわしい神格を創り出し、それにふさわしい呼称として創出されたものと考えられる。

この両者が同じくヌシを語尾とするのは偶然ではなからう。そしてまた、他のヌシを付された神名とは異なつたレ

ヴェルで捉えるべきものと考え^(注1)る。

筆者のそう考えるポイントは、両者共に後次的に創出された神名であるところにある。

吉井氏はヌシのつく神名の出現を、神觀念の変化の相として捉えられた。筆者も先に述べたような神觀念の変遷の流れの中で、人態神の行き着く所に、管掌者・支配者のイメージの投影たる「——ヌシ」のかたちをもつ神名の出現があると考ええる。

そして、アメノミナカヌシやオホクニヌシの神名が構想されたころは、先に述べたように、神は人態神であることが前提で、かつヌシという語尾をもつ神名が既に存在している。このような状況の中で神名を考案する時、どのような語尾が選ばれるのだろうか。

チャミなど、相対的により古く、しかも発現した力やはたらき（物や機能）を、そのままに神格化した神に付されているような語尾に惹かれるものだろうか。ましてオホクニヌシは、まさに地上国土、そしてそこに住まう諸神の管掌者・支配者として構想されているのである。とならばヌシを付す以外にはあるまい。

そしてアメノミナカヌシだが、この神の場合、オホクニヌシ程に具体的に何かを管掌する神として存在せしめられたのかどうか、筆者には今のところ判断がつかない。^(注12)しかし、ある広がり真ん中という、それだけでは単なる「場」を示すに過ぎない語を以って、人態神としての存在感をもつ神名たらしめようとするには、ヌシを付す以外になかったのではないか。即ち「天の中心にいる者」という意味のことを、ヤマトコトバで神名化しなければならぬわけ、まずは天の中心という場が示されねばならないわけだが、単に場を示すだけでは、神としてのはたらきが表出してこない。それに「場」をそのまま神格化するようなことでは、人態神のイメージが確立している世であれば、とてものこと神名として成立し難いだろう。しかし、支配者・管掌者のイメージの投影された——つまりは「人の姿をした者」の色合いの濃い——物・機能（ここでは「場」）から離れて他者であることが示される「ヌシ」を付すならば、「アメノミナカ」という位置は相対化され、その場にあつて、何事かをつかさどる・主宰するといふはたらきをする者の存在が示せる。少なくともヌシを語尾に持つことで、その「場」に人態的な神が存在するというイメージを表現できよう。

要するに、神観念の変遷の流れの中で、右に述べたような状況の、ある時点に於て、自然発生的でなく、また自然な変形でもない新たな神名を創出しようとする場合、語尾にはヌシを付すが、最も手つ取り早く当時の神観念に合致した神名となっただろうということなのである。

注1 溝口睦子「記紀神話解釈の二つのころみ(上)」(『文学41-10』所収)

注2 寺田恵子「天之御中主神の神名をめぐって」(『古事記年報25』所収)

注3 オホクニヌシとオホクニタマの違いなどを考えれば分かりやすいかもしれない。なお後述。

注4 煩瑣にわたるのでいちいち挙げないが、津田左右吉をはじめ、歴史学・神話学・国語学その他各分野に互って実に多くの学者が論じている。

注5 拙稿「記紀神話の成立過程」を参照ありたい。(『学習院大学文学部研究年報29』所収)

注6 津田左右吉「天皇号」(『津田左右吉全集第三卷』所収)・広畑輔雄「記紀神話の研究」等。

注7 吉井巖「ヌシ」を名にもつ神々をめぐって」(『天皇の系譜と神話二』所収)

注8 溝口前掲書。

注9 吉井前掲書。

注10 拙著『日本神話論考 出雲神話篇』

注11 たびたび引用している溝口氏の論では、全体として吉井氏のとほ、かなり異なった論を展開されているのだが、それでもヌシという語の語感や、成立の新しさという点では一致を見ている。

注12 北辰の神格化したものと重なり合うとして、例えば、積極的に星辰の運行をつかさどると認識したのか、じつと一所にいる、その廻りをあらゆる物が(敬して)巡っているといった風に、ただそこに存在する事自体に意義を見たのか。と、こういった辺りが筆者にはよく把握できないのである。